

Case Study

支部ケース・スタディ

メディアミックスで伝える 愛情いっぱいの給食

入間ケーブルテレビ(株)

渉外企画課長

篠田 敬子



Kitakanto

「給食の時間は、勉強ができる子も、運動が得意な子も、ちょっと苦手な子も、みんなが笑顔になる時間なのよ。」

9年前、ある栄養士の先生がおっしゃったひとことが給食の取材のきっかけでした。

当時、私はグループ会社のFMチャッピーで小学生の作文を紹介する番組を担当していました。FMチャッピーは認知度を上げることが当初の課題だったため、多くの人に知ってもらうためには子どもたちの声を放送することが近道だと思ったからです。もちろん、大人になった時にファンになってもらいたいという気持ちもありました。

始めたばかりの時には学校に収録依頼することも簡単ではありませんでしたが、数年が経ち人気コーナーのひとつになりました。でも一方で、少し気になることがあったのです。それは、登場する児童がみんな優秀なこと。せっかく放送に出るのだからと、事前の朗読練習を徹底してくださる先生もいらっしゃいました。そんな時の収録は時間もかからずスムーズで、非常にありがたかったです。しかし、たとえ作品としては特別素晴らしいものでなくても、もっと気軽に、誰でも出られるような身近な放送局でありたいという気持ちがありました。そんな時に聞いた冒頭の一言は、心に響きました。



ラジオの生レポートは話題があればワイド番組内で随時入れていましたので、すぐに始めることができました。さっそく給食の時間に教室へ行くと、先生の言葉通り、たくさんの笑顔が私を迎えてくれました。「給食」という、誰でもある種のノスタルジーを感じる話題で、身近な学校が登場。笑い声いっぱいの生レポートで普段の教室の様子を伝える中継は、お昼の番組内のレギュラーコーナーになりました。そして、何度足を運んでもネタがつかない給食に驚きました。

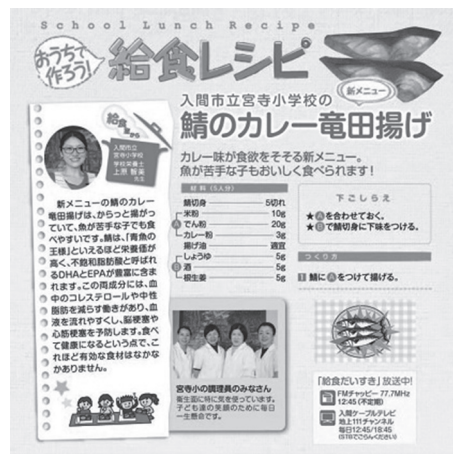
季節や日本の文化を意識して献立を作る。
化学調味料には頼らず、手間がかかっても手作りにこだわっている。
栄養士が食材を持参して各教室を回り、食べ物について解説する。
給食に使われている野菜を届けてくれた農家を紹介する。
入学したばかりの1年生の配膳が、だんだんうまくなっていく。
とうもろこしの皮むきなど児童が調理に参加する。
時には学校の畑で採れたものも調理する。
子どものアイデアも献立に採用する。
新メニューが毎月登場する。
お誕生日の友達には、クラス全員が牛乳で乾杯する。
「すべての命をいただきます」と、手を合わせてあいさつをする。

感動することばかりでした。

栄養士の先生方は子どもたちのために苦労を惜しみません。食べることの大切さがわかる大人になってほしいという思いから、教室へ積極的に出向き子ども達とコミュニケーションして、様々な工夫をしています。しかし、陰の努力についてはあまり語りませんでした。当たり前のことをしているという思いもあったのかもしれません。だからこそ、作り手の思いが保護者の皆さんにどれだけ伝わっているのだろう…、「給食費を払っているのだから、食べて当たり前」という感覚の人も少なくないのではないかと感じました。また、行政改革の一環で、センター給食への移行も検討されているという話も聞き、各学校に給食室があることの大切さを多くの人に伝えたいという気持ちが大きくなっていました。

そして、2007年に制作編成課のスタッフと相談して、ケーブルテレビの番組「給食だいすき」がスタート。ラジオでは教室の様子を伝えることがメインでしたが、テレビでは栄養士の先生が毎回登場し、メッセージを収録しました。全16校ある小学校にそれぞれいらっしゃる栄養士は、どの方も給食への思いを話してくださいましたし、子ども達は最高の笑顔と自然な表情をカメラに見せてくれました。

取材を通じて、給食ならば苦手なものも食べられる子どもが多いことに驚きました。もちろん、友達と一緒に食べる楽しさも手伝ってのことかもしれませんが、レシピにも工夫があったのです。栄養士の先生は、絶えず新しいメニューを検討して試作。その中から給食に適するものを選定し、毎月採用していました。子どもたちの好みを知り尽くした先生が考える、子ども達に食べてほしい食材を使ったメニュー。さらには流行も取り入れてられていて、魅力的でした。そこで、フリーペーパーへレシピの連載をお願いしたところ、先生方が教育委員会の許可も取り付けてくださり、実現することになったのです。1年半に1回くらいの頻度で執筆の順番が回ってくることとなりますが、忙しい中でも丁寧に原稿を書いてくださっています。併せて、調理員の皆さんの写真も撮影し掲載します。





学校で配布する「給食だより」にも、栄養士からのメッセージは載っています。しかし、ある先生に「私たちがどれだけ食の大切さを話すよりも、第三者の視点で給食の大切さを紹介してくれることの方が大きな影響力があるので、ありがたい」と言われたのです。私はこの言葉に、重みを感じました。給食の取材に限らず、私たちケーブルテレビは、地域の皆さんの代弁者でありたいと思いました。

取材の際に気をつけていることがあります。それは、学校側の負担を減らすことです。以前、作文の取材で、収録したデータが破損してしまい、再度収録の依頼をしたことがありました。この時、かなり叱られました。先生のお怒りはごもっともです。子ども達を時間外に拘束することや放送に出ることを保護者に確認するのは煩雑なこと。多忙を極める学校の先生に通常業務以外のことをお願いするのは、こちらが思っている以上に負担がかかるのです。

給食の取材では、基本的に事前の打ち合わせはしません。当日も担任の先生に、「いつも通りで」とお願いしています。取材ネタは、教室の訪問の直前に職員室前に掲示されている学校新聞で直近の行事を把握し、また教室内の掲示物からインタビュー内容を考えます。子どもたちがいきいきと答えられることが最優先なので、誰でも答えられる簡単なインタビューが主です。また、給食の終わりの時間は、毎回担任の先生に確認します。取材が昼休みまで長引くことを大目に見てくださる先生もいますが、中には時間どおりに行動することを大切にしている先生もいらっしゃいます。取材への不安を解消し、次の取材依頼もスムーズにできるよう、通常の学校の時間の流れはなるべく変えず、負担を少なくするよう心がけています。また、放送日時をお知らせするチラシは、そのまま配っていただけるようにクラスの人数分印刷して持参します。

番組が単調にならない工夫としては、子ども達が出題するメニュークイズや、よさこいソーランがカッコよく踊れる子や掃除の達人など、学校やクラスの様子がわかる「クラスの1等賞」のコーナー、さらに可能であれば学校に野菜を納めている農家さんからのメッセージを入れています。

震災後、コミュニティFMを併設するケーブルテレビが増えました。どの局でも媒体を最大限に活かすためメディアミックス企画を試行錯誤していると思います。以前、FMチャッピーに勤務していた私は、両者の現場の事情やメディアの特徴を分かっているのは私だけという自負もあって、よりメディアミックスに強い思い入れがありました。イベント会場からの同時生放送をしたり、「子ども討論会」をテレビとラジオ両方で流したりと、思いつくことはいろいろ試してみましたが、手ごたえはイマイチでした。ラジオやテレビのそれぞれの良さを活かして相乗効果を生んでこそメディアミックスだと思うのですが、あまり広がりを感じなかったのです。多くのスタッフに関わってもらいながら、成果の出ない企画では自信をもって継続できません。その結果、1回限りで終わってしまう企画も少なくありませんでした。

しかし、今までうまくいかなかったのは、メディアミックスすることを目的に企画を考えていたからなのだと、今回ケーブルアワードで賞を頂き、気づきました。そして、地道に継続していく中で、よりよいものを追求してこそ広がりが生まれてくるのだと感じました。

給食の話題は、はじめからメディアミックスをしようと考えていたわけではありません。子ども達の元気な様子を放送したいとラジオの生中継から始まり、ラジオでは伝えきれない話題をじっくり取材するためにテレビ番組を制作。そして、誌面のレシピ紹介に発展しました。現在は、SNSでも発信しています。まずは「伝えたいこと」があって、一人でも多くの人に伝えたいと展開していった結果が現在の形です。

大切なことは手段や方法論ではなく、地域に必要な話題や伝えたいと思えるニュースを見つけることでした。また、ケーブルテレビだけで企画を立てて実行していくには限界があります。給食の取材は、先生方の協力があって実現している企画です。地域には様々な分野で活躍している方がいます。そんな方とのつながりは、ケーブルテレビの大きな財産です。その中から協力者を見つけ、一緒に企画を育てていくこともポイントだと思います。

メディアとは、本来テレビやラジオを指す言葉ではありません。各種団体、サークル、行政、市民の皆さんなど、情報を持っている人たちをケーブルテレビがつなぎ、価値ある情報を発信していくこと。それこそが地域のメディアミックスと言えるのではないのでしょうか。

最後になりますが、本年4月で入間ケーブルテレビは25周年を迎えました。創業当時の思いを残そうと、創業時を知る人を取材して、地元のノンフィクション作家さんに物語を書いていただき記念誌を製作しました。その取材の中で、ケーブルテレビが地域の情報伝達のため、豊かな情報サービスのために生まれた会社であること、そしてそれを応援して下さった大勢の方がいたことを改めて感じました。そんな創業の精神を忘れず、地域の皆さんに感謝しながら、これからも地域のお役に立てる仕事に取り組んでいきたいと思っています。